



部屋に行ってゴロリと横になることだった。
 玄峭和尚の哲学によると、食べものは仏がその慈悲によってわれわれに与え給うもので、それを腹におさめたとたんすぐ横になるのは、いかにも感謝の心を失した行為に思えてならないのだった。

そこで、ある日、玄峭和尚が智雲に注意を与えようと部屋に行くと、なんと智雲は、法衣をまとったまま大きな牛に姿を変えて横たわっていたのだった。そればかりか、牛になった智雲は、いちはやく玄峭和尚のいわんとするところを察し、自分のあさましい姿を深く恥じ、ただちに寺を飛び出して近くの沼に身を投じたという。

以来、その沼を「牛食い沼」転じて「牛久沼」と呼ぶようになったとまれ、地名には、人の名前と同様、しばしば首をかしげさせられるものがある。牛久沼もそのひとつでその由来が「牛を食った沼」だとは説明を聞くまではちよつと見当もつかない。

と同時に、この民話は、仏の慈悲を説く仏教にとつて、なんとも皮肉な話ではなからうか。

食べてくねる牛になるが牛久沼うしくぬまとなった遠い民話

昔の子供は、よく母親にこういつてたしなめられたものである。

「ご飯を食べたあとすぐ横になると牛になるわよ」

いまの子供なら、さしずめ

「ママ、それ面白い。ひとつやってみるか」

となるところだが、昔はこれでちゃんとしつけになったのだから時代は確かに変わった！
 そればかりか、いまの栄養学では食後横になることはむしろ消化を助けることになるという。それが「牛になる」とは何とも理不尽な話だが、その「わけ」はこうである。

茨城県の牛久地方に伝わる民話に、牛久沼にまつわるこんな伝説がある。

牛久沼に近い龍ヶ崎市に「金童寺」という名刹めいさくがあり、いつのころかここに智雲という小僧さんがいた。当時、金童寺の住職は二代目で、玄峭和尚と呼ばれていたというところまで分かつているから、いいかげんな話ではない。

智雲はともかく、いたってまじめな性格で、朝夕のおつとめはもちろん、寺のふき掃除や庭の落ち葉掃き、水汲みなどの仕事のほか、学問にも熱心でそれこそ模範的な「小坊主」だった。が、ただひとつ、玄峭和尚に気になることがあって、それは食事のあと、智雲が自分の